

# 2011 夏休み すいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

# 1・2年生

「おじいちゃんのもうふ」 ミュリエル・ブロック 文 ジョエル・ジョリヴェ 絵  
ふしみみさを 訳/光村教育図書

ジョセフが生まれたとき、したてやをしているおじいちゃんのおくりものは、てづくりのすてきなもうふでした。おおきくなって、もうふがきたなくなってもいつもいっしょ。おかあさんがすてたのをひろって、うわぎにしたてなおしてもらいましたが。



「てんごくのおとうちゃん」 長谷川義史 作/講談社

おとうちゃんとおもいでは、たくさんある。キャッチボールをしてくれたこと、ウクレレをかってきてくれたこと、おかあちゃんがかってくれないホットドックをかってくれたことなど。ほくは、てんごくにいったしまったおとうちゃんに、おてがみをかいたんだ。



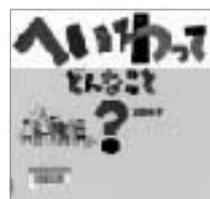
「山のとしよかん」 肥田美代子 文 小泉るみ子 絵/文研出版

山の中で、はたけしごとをしながら、ひとりでくらしているおばあさんがいました。ある日、おいしいにいれておいたなつかしいえほんを見つけ、はたけしごとのあいまに、こえをだしてよむようになりました。そしてそれを、だれかがきいていることにきがつきました。



「へいわってどんなこと？」 浜田桂子 作/童心社

へいわってどんなこと？ きっとこんなこと。せんそうをしない。おなかがすいたらだれでもごはんがたべられる。ともだちといっしょにべんきょうできる。おもいっきりあそべる。あさまでぐっすりねむれる。あたりまえのことだよ。日本・中国・韓国の絵本作家が手をつなぎ、こどもたちにおくる平和絵本シリーズの1冊です。



「すずちゃん」 さえぐさひろこ さく ひろかわさえこ え/佼成出版社

ある日、よわったすずめを見つけたようちゃん。うちにつれてかえってエサをあげたり、うたをうたってあげたり…いっしょうけんめいおせわをします。そとでくらすとりは、うちの中ではかえないとわかっているのですが、あまりのかわいらしさに、すずめがげん気になっても、はなれたくなくなってしまう。



「はじめてのゆうき」 そうまこうへい 作 タムラフキコ 絵/小峰書店

としおは、すごくうれしかったときやおこるときに、岡山べんになるお父さんがだいすきだ。でも、そんなお父さんにもかくしていることがある。それは、学校でなかまはずれにされていることだ。ある日としおは、ゆうきをだしてクラスみんなにさげんだ。くちからとびだしたことは、それは岡山べんだった。



「わたしのおかあさんは世界一びじん」 ベッキー・ライアー ぶん 光吉郁子 やく  
ルース・ガネット え/大日本図書

はたけでてつだいをしていたワーリヤは、むぎばたけのなかですやすやひるね。目をさますと、おかあさんのすがたがみえません。大泣きのワーリヤは、おかあさんのことを聞かれ「わたしのおかあさんは世界一びじん！」とこたえました。びじんのおかあさんを、みんながさがしてくれます。



「おすしのさかな」 川澄健 監修/ひさかたチャイルド

みんなのだいすきな、おすし。おすしはなにからできているのかな。まぐろやさけなどの、うみやかわでおよいでいるさかなだよ。さかなは、どうやっておすしになるのかな？きみのすきなおすしは、なあに？



# 3・4年生

## 「かかしのじいさん」

深山さくら 文 黒井健 絵/佼成出版社

かかしのじいさんのしごとはずめをおっぱらうこと。「こら、くっちゃならねえぞ」「やーだよ。こめのはなって、うまいんだもん」ずめはじいさんをしたってやってくる。いつしか、じいさんもずめをまつようになった。そんなある日、おひやくしょうさんがずめをつかまえるために、かすみあみをかけようとしているのを知ったじいさんは…。



## 「ふゆねこ」

かんのゆうこ 文 こみねゆら 絵/講談社

ちさとのおかあさんはくひかりのくに>にいてしまいました。そんなあるひ、ちさとのいえに、ももいろのマフラーをつけたふゆねこが、たずねてきたのです。おかあさんにたのまれて、あみかけのてぶくろをあみにきたといっています。さっそくちさとは、おかあさんのへやから、あみかけのてぶくろがはいったかごをもってきました。



## 「0じいさんのチェロ」

ジーン・カトラー 作 グレグ・コーチ 絵 タケカワユキヒデ 訳/あかね書房

いま、わたしのまちは戦争にまきこまれている。男の人たちは戦いにいてしまい、まちにいますのは子どもと女の人と老人と病気の人たちだけ。まちにはいつも「オー」っておこる0(オー)じいさんがいて、わたしたちをおこる。ある日、ロケット弾が落ちた。0じいさんは、チェロを弾きだした。音楽は、救急トラックと同じようにみんなに生きる勇気をくれた。



## 「たれ耳おおかみのジョン」

きむらゆういち 作 高島那生 絵/主婦の友社

たれ耳の犬ジョンは、3か月前、パパ、ママ、タクちゃんとピクニックに行きました。そして、その時に強くてかっこいいおおかみと出会い、そのすがたにあこがれてしまったのです。ジョンは仲間に入れてもらおうと、おおかみにたのんでみることにしました。



## 「赤ちゃんは魔女」

ピアンカ・ピッツォルノ 作 杉本あり 訳 高橋由為子 絵/徳間書店

ゼップ家に生まれた、七人めの赤ちゃん。この子は、あふろでささえなくてもぶかぶかが浮くし、ほうきにまたがると宙に浮くし…まるで魔女みたいですよ。同じころ、なまけもの若者、アストルバーレは大おじさんのばくだいな遺産を相続できると喜んでいました。でも、大おじさんの遺書には「一年と一ヶ月以内に、魔女と結婚しなければ遺産はわたさない」と書いてありました。



## 「わたしのしゅうぜん横町」

西川紀子 作 平澤朋子 絵/ゴブリン書房

わたしが外国を旅していたときのこと。地図を見ながら水くみ場をさがして水をのんだあと、小さな男の子にであいました。あとをついていくと、「しゅうぜん横町」という看板のかかった通りにでました。きつといろいろなしゅうぜん屋が集まっているのでしよう。わたしは、まず「たんす屋」に入ってみることにしました。そして、そこのご主人から、ある指輪だんすにまつわる話をききました。



## 「アヤカシ薬局閉店セール」

伊藤充子 作 いづのかじ 絵/偕成社

さくらさんというおばあさんが、ひとりでやっているアカシヤ薬局。お客さんがこなくなり、閉店セールをはじめます。さっそくポスターをつくってはりますが、古道具屋で買ったまねきねこ「フクノ介」がうごきだし、チラシを書きはじめます。そのチラシは風にとばされ、ふしぎなお客がぎつぎにやってくるようになります。アカシヤ薬局が、アヤカシ薬局になっていたのです。



## 「糸に染まる季節」

大西暢夫 写真・文/岩崎書店

「十日町の色を出したいから、十日町で育った植物で染めたい」ヨモギ、クルマミ、スギ、ニセアカシア…。そのときの旬の植物を使って真っ白な糸を染めていく。季節を大事にしなが、同じことを繰り返している。でも同じ色にはならない。

新潟県十日町市で暮らす染織家の暮らしを写真とともに紹介する。



# 5・6年生

## 「ホームランを打ったことのない君に」

長谷川集平 作/理論社

ぼくは出口塁、野球の試合で2三振のあとセカンドゴロ。また打てなかった。ぼくは仙吉にはげまされた。野球選手をしていた仙吉は去年交通事故にあい、病院から歩けなくなるかもしれないと言われたらしい。仙吉は言う。「オレ、あきらめていないぞ。」よし、ぼく、いつかホームランを打てるようがんばる。



## 「わたしのとくべつな場所」

パトリシア・マキサク 文 ジェリー・ピンクニー 絵 藤原宏之 訳/新日本出版社

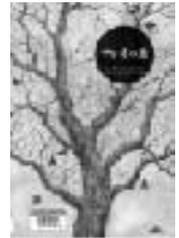
パトリシアは、いつもはおばあちゃんで行く“あの場所”に一人で行く決心をし、おばあちゃんも許してくれた。バスに乗って「黒人指定席」にすわり、公園の「白人専用」ベンチにすわるのをさげ、何度もきどきし、泣きながら“あの場所”“わたしのとくべつな場所”へ向かった。やっと着いたそこには、「公共図書館：だれでも自由に入ることができます」とあった。



## 「アンネの木」

イレヌ・コーエン=ジャンカ 作 マウリツィオ・A.C.クウアレロ 絵 石津ちひろ 訳/くもん出版

第二次世界大戦中、ユダヤ人がナチス・ドイツに不当な迫害を受け殺されたこと、その一人に「アンネ・フランク」という少女がいたことを聞いたことがあるでしょう。アンネがナチスから身を隠していた隠れ家の外に、一本のマロニエの木がありました。この一本の木が、一步も外に出られない少女に、自然の恵みと安らぎと希望を与えていました。一本のマロニエの木が、あの時代を語ります。



## 「ゴエさん -大泥棒の長い約束-」

おおどろぼう なが やくそく 結城乃香 作 星野イクミ 絵/朝日学生新聞社

孝太郎は、家の近くのほくらから出てきた汚いおじいさんと知り合いになった。石川五右衛門と名乗る、このおじいさん。ずっと昔の大事な約束を守るために、生まれ変わった子どもをさがしているという。「ゴエさん」として、孝太郎の家にしばらく住むことになったおじいさんによって、やる気をなくしていたお父さん、毎日イライラしていたお母さん、家族みんなが変わっていった。



## 「おじいちゃんが、わすれても…」

大塚篤子 作 こころ美保子 絵/ポプラ社

小学5年生の杏は、この春からジュニアテニスクラブにかようことになり、毎日が楽しい。得意のストロークは、大好きなおじいちゃんが教えてくれた。でも、認知症という病気にかかったおじいちゃんは、人格や人柄がすこしずつかわっていく。そんなある日、杏は川で犬をひろった。ラックと名づけられたこの犬は、動物ぎらいのはずのおじいちゃんになぜか近づいた。



## 「ぼくたちとワッフルハート」

マリア・パル 作 松沢あさか 訳 堀川理万子 絵 /さ・え・ら書房

9歳のトリレとレーナはとなりどうし。レーナはとびっきりおもしろいことをいつも思いつく。楽しいけれど、おとなたちにおこられるのはトリレ。トリレはレーナを一番の親友と思っているのだが、レーナはどう思っているんだろう。

小さな入り江を舞台に、トリレとレーナの楽しい毎日を書いたお話です。



## 「アニーのかさ」

リサ・グラフ 作 武富博子 訳/講談社

お兄ちゃんがいなくなってから、心配ばかりする子になってしまったアニー。どうして病気に気がついてあげられなかったのかと、医学書を読んで病気のことはばかり考えている。けれども、近所に引っ越してきたおばあさんと話をしたことから、アニーの気持ちは少しずつ変わっていった。



## 「ブナの森は宝の山」

平野伸明 文 野沢耕治 写真/福音館書店

ブナの森は、水の森。森の中にはたくさんの沢が流れ、いたる所にわき水がある。森と水が豊かだと、多くの生きものがそこで生活をともにする。ブナのたくましい姿、きれいな草花、鳥の声、けもの気配、川のせせらぎ…。秋田県奥森吉にあるブナの森の春夏秋冬の美しさと、森がはぐくむ「いのち」の豊かさをとらえた写真集。

